

開拓者の生活

石狩の開拓は、生振^{おゆる}と花畔^{はななぐさ}で明治4（1871）年に、樽川、高岡で明治18（1885）年に始まりましたが、開拓者の日常生活には大変な困難がありました。



開拓者が生活した掘立小屋
(北海道開拓記念館ほか（2000）より)

■住まい

当初は、丸太を八方から組み合わせ、横木をわたしてヨシやササで編みつけた「おがみ小屋」とか「三角小屋」「編み笠小屋」と呼ばれたものでした。その後、2間×3間くらいの大さの「掘立小屋」が建てられましたが、これも粗末なもので、屋根や壁はヨシやササで作り、床はヨシ、ササ、麦わらなどの上に筵（むしろ）を敷いたものでした。灯火はカンテラ（ブリキの箱形石油ランプ）や手製のあんどん（木枠に紙をはり中に油皿を入れたもの）が使われましたが、後にランプが普及しました。

■食べ物

米など食べられず、ソバ、ムギ、アワ、イナキビ、ジャガイモ、マメ、山菜など、なんでも食料としました。イモ、マメ、ソバのごった煮は「従兄弟煮」と呼ばれ、常食でした。たんぱく源として、出稼ぎの報酬のニシンを、身欠きや又力漬にして保存していました。

■身につけるもの

衣類は和服で、男は股引、女はモンペが普段着兼仕事着でしたが、予備のものなどなく、主婦は洗濯と繕いに追われる毎日でした。冬は綿入れの着物や「袖なし」「チャンチャンコ」を重ね着して寒さを防ぎ、つまご（足元に覆いをつけたわらじ）を履き、手っかえしと呼ばれた手袋をしていました。また、テント地は外套に、鮭の皮は履物（ケリ）に、柳の皮はぞうりにと、身近かな様々な物が利用されました。

開拓者の日常生活はこのように苦労の連続でしたが、数年後に貸付地の開拓が完了して自分の土地になると、土台付きの家が建てられ、生活も少しずつ安定していきました。しかし、主食のご飯は、大正時代になっても、米より麦の量が多い、黒っぽい麦ご飯でした。

（石井滋朗）

- （1）高岡開基百年記念誌編集委員会（1984）石狩高岡開基百年記念史、高岡開基百年記念事業協賛会。
- （2）生振村愛知県団体開拓百年史編集委員会（1993）生振村愛知県団体開拓百年史、愛知県団体開拓百年記念事業協賛会。
- （3）北海道開拓記念館・開拓の村文化振興会（2000）開けゆく大地、北海道開拓記念館。